

千刈狸の呟き

「発熱あり近医を受診、かぜと言われて投薬を受けるも解熱せず云々」というような病歴を病院勤めの経験のある狸なら誰しも書いた覚えがあるだろう。広辞苑を開いてみてもこの「近医」は載っていない。一般には認知されていない狸の業界の特殊用語なのだ。しかもわが業界の中でも大学病院や大病院の狸たちが用いることが多いことから窺えるように、近医は文字通り近くのお医者さん（開業医）を指しているのはもちろんだが、診療能力の低い格下の町医者という、いささか侮蔑的なニュアンスを帯びていることは否定しようもない。近医というものは、かぜや腹痛のような、いわば放っておいても自然に治癒するようなありふれた病気ばかりを相手にして、しかも実入りがい、と狸自身も勤務医であった頃はそのようなイメージを持っていた。狸はその後病院の過重労働に耐えかねて近医に転じたわけだが、実際、近医になってみると、想像していたよりも気楽な商売ではないと知ることになった。

病院勤務の頃は休日・夜間を問わず病院から急な呼び出しを受けることが頻繁にあり、結果、血圧の上昇を招いて早30代から降圧薬を服用することになった。これが開業後は、日曜・祝日だけとはいえ完全に休むことができるようになり、また、夜中に叩き起こされることもなくなって、体の調子はずいぶん良くなったと感じている。

学会発表というのは、医師としてのキャリアの中でとりわけ重要な意味を持つことはわかってはいても、あがり症の狸はこれが大の苦手である。勤務医の頃は、なかば義務としておよそ医学の発展に貢献しそもない演題をひねり出して学会発表をしていたものだが、近医になってからは、そのような務めから解放され、心安らかな日々を送ることができるようになった。

ここまでは近医になってよかったと思えることだが、一方で新たな苦勞や責任を負うことになった。病院勤めの頃は、収支のことなど念頭になく、語弊があるが、なかば好き放題に診療を行っていたらよかった。いざ開業してみると、覚悟していたことではあるが、診療だけでなく経営にも腐心しなければならなくなった。借金の返済、労務管理、業者との交渉などなど診療以外の仕事が山ほどあり、心配の種は尽きない。いわば、医師としての仕事のほかに経営者としての業務があるわけで、これが思いの外ストレスに感じる。安定的に大勢の患者さんが訪れてくれれば安泰であろうが、待合室が閑古鳥であったりすると気の小さい狸はたちまち先行き不安に駆られてしまうのだ。

～ 近医の呟き ～

(やせ狸)

勤務医であれば、嫌になったらいつでも辞めてほかの医療機関に転じることはさほど難しいことではない。一方、近医はそれなりに定期的に通院する患者を抱え、また、スタッフの生活もかかっているわけであるので、おいそれと簡単に投げ出すわけにはいかない。また、辞めるつもりがなくても、病気や突然の事故により医療機関の休廃止を余儀なくされることもありうる。結果、患者やスタッフに迷惑をかけることになる。

さて、近医に期待される役割は、プライマリケアを担う家庭医としての働きであろう。実際、普段の診療の中で専門医ならではの技術や知識を発揮できる場面は少なく、かぜや腹痛といったいわゆる common disease を診ることがほとんどである。子供から年寄りまで間口を広げて幾多のありふれた病気を診ていくなかで、専門医へ送るべきケースを見逃さないことが近医の努めである。そのためにも絶えざる診療能力のブラッシュアップが必要であるが、怠惰な狸はややもすると安易に流れやすい。このあたりが格下にみられる一番の要因と思いつつも、記憶力・集中力の衰えはいかんともしがたく、新しい情報を仕入れても知識の半減期は短くなるばかりである。

もうひとつ、在宅医療も近医の重要な仕事である。施設から在宅へというのが厚生労働省の政策である。しかし、今更あれこれと厚生労働省に言われなくても在宅医療は昔から町医者がかかっていたことである。狸も当然のこととして、開業以来、求めに応じて寝たきり患者の往診治療を行ってきたし、必要によって緊急に患者を訪れることもあった。在宅医療を評価して診療報酬のうえで優遇してくれるのはありがたいが、在宅療養支援診療所の要件が、24時間いつでも往診できることとか、今般の診療報酬改定で新設された機能を強化したその場合、3名以上の往診医が必要、年間の看取り数が2件以上などと条件がさらに厳しくなり、近医にとって敷居がますます高くなった。算定できなければ高点数は絵に描いた餅でしかない。「いつでも往診できる」という態勢よりも、「往診した」という実績を評価して欲しいと思うのは狸だけだろうか。

かつて本欄で勤務医の過重労働について論じたことがあったが、現在も過酷な状況はいささかも変わっていないように思う。勤務医の逃げ場としての近医でなく、お互いに補完/協力しあえる枠組みがあればと思いつつ、狸はこれからも「泥臭く」かつ「肅々と」近医ならぬ近狸に徹していきたいと思う。